

人間哲学の原点に迫る

学校法人昌平黌 理事長

儒学文化研究所 所 長

田 久 孝 翁

一、天の道は仁道の始まり

ひと読んで何れの文字も人間、人が二人と書いている。仍て天と仁とは、宇宙と人間の在るべき姿を論していることが理解出来る。

これを朱子学の創始者朱熹は理気二元論として、即ち理は宇宙の原則であり、気はその現象であると言っている。従って今日で言う理科学の原点も孔子の教え、天の理に基づく仁者の道によって開かれたものであると言ってよい。

而して二五〇〇有余年、不滅の真理を物語る世界四大聖人の筆頭に数えられる所以である。

さりながら孔子の思想を代弁する儒学（論語）の辿った道のりは決して平洋坦々としてきたものではない。

紀元前二二三年、秦の始皇帝による「焚書坑儒」の事件によって証明される儒学に対する撲滅運動はその後も続いている。一二〇〇年代、元のフビライによる一時期儒学の禁止もある。是れ等は何れも富国強兵論の所産であり、仁政徳政を冒瀆する覇権国家の仕業であった。更に、一九六〇年代に行われた文化大革命の名に於いて、虚礼偶像廃止の事件であるが、何れも三〇～四〇年という短期間に終わっていることを思えば、中国国民の思想的哲学的その原点には何れも孔子の教えが根強く浸透して来たかを如実に物語るものである。紀元前一六〇年、漢の武帝によって儒学は中国の国学と定められ董仲舒等の建議による「科举制度」文官任用試験制度が登用され、儒学は中国人の生活様式の基本的役割を果たして二〇〇〇数百年、然も東洋の哲学として東南アジアを始め西洋諸国の間に至るまで、正に世界四大聖人の一人として今日に至ることは衆目の認める処であり、それが聖人の聖人たる所以である。

斯くして二五五〇余年が過ぎ去った今日に至るも世界の各地には民族、宗教等による戦争の恐怖が後を絶たない。

更に地域的（日本）には幼児虐待防止法など、万物の霊長たる人間社会の常識は一体何処へやら、アニマル（動物）以下の類と化しているのである。このことを考えると、戦後五十五年我が国の社会教育の在り方は果たしてこれで良かったのか。国を挙げて反省の時を迎えている。「治に在りて乱を思う」。世は正に儒教ルネサンス（古典文化の復元）が叫

ばれてやや久しく、一九八九年オーストラリア、ウォーレン・リード氏の孔子礼讃は北アジアと称する（東南アジア）一帯に及ぼした儒学文化の影響は計り知れないものがあり、中国は元より日本、南北朝鮮半島、台湾、シンガポール等列国に及ぼした儒学文化の影響を考えたときに、果たして日本人の生活様式の中で儒学思想を省いて何が残るだろうかと言って過言であるとは思われない。教育改革を背景に日本人の歴史観について諸外国の干渉を受けるそれ自体、仁義に反することであり、近代的史実は少なくとも一世紀を単位に温故と知新、史実に従って近隣諸国（世界）の平和に共通した認識に基づく（平天下）治にあって乱を思う経世済民、即ち現代型平和経済学の樹立に努めることが是れ即ち儒教ルネサンス、二十一世紀の課題である。

「青年よ大志を抱け」一寸の光陰軽んずべからず。子曰く、是れを学び是れを知る時に初めて道は開かれることを知るべきである。